

# 金義信の墨跡「妙喜庵」をめぐって

— 附〈影印〉『拾遺扁額要覧』 —

はじめに

墨跡「妙喜庵」(図版①)は寛永二十年(一六四三)と明暦元年(一六五五)に朝鮮通信使の写字官として来日した金義信(生没年不詳)揮毫の書である。<sup>①</sup>筆者は所蔵先である妙喜庵(京都府大山崎町)でこの書を調査し、美術館の展覧会で出品する機会を得、その時には画像とともに簡潔な解説文を冊子に記録した。<sup>②</sup>その冊子はコンパクトなものだったので、金義信その人が日本で書き残した多くの墨跡の紹介やこの一軸「妙喜庵」の伝来について充分な論を展開させることができなかった。ここでは金義信書「妙喜庵」が表千家宗匠久田宗也(一九二五―二〇一〇)のはたらきによって大山崎の妙喜庵にもたらされた事情を記し、

片 山 真 理 子



(図版①) 金義信書 墨跡「妙喜庵」(妙喜庵蔵)  
(図版②) 金義信書 扁額「妙喜世界」(靈源院蔵)

また朝鮮通信使と臨濟宗、特に建仁寺の当時の様子に触れ、建仁寺塔頭靈源院の扁額「妙喜世界」(図版②)の存在を紹介する。さらに元來墨跡「妙喜庵」はかつて建仁寺に存在した妙喜庵に宛てて揮毫された可能性を指摘したい。禅林の墨跡が名僧から徐々に文人も書くようになり、そのなかには朝鮮通信使の正使を筆頭に写字官などが滞在中に依頼を受けて揮毫したと思われる扁額が各地の塔頭や寮舎に残されている。こうして京都五山と茶道とは密接した関わりを続けており、茶人たちが五山の舎号とともに禅味を有する墨跡を愛好し、茶禅一味の精神を貫いている一例を報告する。

### 寛永年間の京都と朝鮮通信使

寛永年間には、文禄・慶長の役で分断された日朝の信頼関係はようやく回復の兆しを見せるようになった。江戸時代のはじめに対馬藩によつた国書改ざんが露見したことによつて取り潰し寸前の危機に瀕した対馬藩宗氏は家老の柳川調興や規伯玄方を流罪とされ、藩主宗義成はお咎めなしという決裁を幕府から受けた。<sup>3</sup>その後幕府は対馬の以酹庵に京都五山から碩学僧を輪住させて、対朝鮮の外交文書の起草や実務にあたらせたのは周知の事実である。

この頃、日本の芸術文化は後水尾天皇はじめとする皇室サロンを中心に展開し、中世以来の伝統を引き継ぐ京都の町人勢力と天皇を中心とする公家勢力が幕藩体制を強化する江戸幕府に対抗する形で古典文芸、文化の興隆を生み出し、展開していった。初期には出雲阿国や古田織部に代表されるように桃山文化の影響を受けた「かぶき」の文化が一世を風靡したが、元和偃武後は各階層において様々なサロンが形成されるようになった。代表的な人物としては、茶の湯の千宗旦、金森宗和、小堀遠洲、生け花では後水尾天皇、池坊専好。文学の三浦為春、烏丸光広など。儒学は石川丈山、林羅山、書道では寛永の三筆(近衛信尹・松花堂昭乗・本阿弥光悦)、や角倉素庵。絵画は俵屋宗達、狩野探幽、狩野山雪、雲谷等益、陶芸は野々村仁清など列挙することに暇がない。また当時の建築物としては智仁親王の桂離宮、後水尾天皇の修学院離宮などが誕生している。しかしその後、京都は内陸であり、盆地という立地で十分な水運ネットワークに乗る事が出来ずに経済的に低迷し、その中心を大坂に譲り、後に元禄文化が花開く事になる。こうした時代的な背景を考慮に入れ、この時代に大船団でやってきた朝鮮通信使は当時展開していた芸術的活動においても異文化交流がひとつの刺激になったことは想像に難くない。<sup>4</sup>日本独自の文化と共に朝鮮文化の往来が新たな息

吹を吹き込んだものと解釈することも可能であり、並行して取り込まれた中国文化との関わりや日本人の趣向と創意工夫もまた相乗効果として存在したであろうことも強調して、ここでは朝鮮通信使に焦点を当てた論を展開する。

## 写字官・金義信の額字

さて、三字の大書「妙喜庵」を揮毫した人物・金義信は通信使の写字官という職位で寛永二十年と明暦元年の二度来日した人物であり、号は雪峯である。二度も来日した写字官であるが、本国で金義信の人物像を照らした文献や現存する作例がほとんどみられないのは、どうしてだろうか。字の大きさから見ると禅院の堂舎などの入り口に掛けるに相応しい堂々とした筆力の強い書風を特色とし、大字に巧みな南宋の張即之（一一八六―一二六六）の厳格な筆致を忠実に受け継いだ様子がうかがえる。脈絡に一貫性と躍動があり、深い厚みのある仕上がりであるが、崩れたところや少しも隙のない書風は金義信その人の書体と言ってもよいだろう。もともと張即之の楷書の法は入宋日本人僧の中で張即之の書風を無準師範（一一七七―一二四九）に求め、日本に送り伝えたものがある。なかでも額字「梅檀林」は東福寺什室としても名高いものとして襲蔵されてき

たもので、その雄渾で厳格な趣は日本の禅林文化において珍重され、またこれを規範とする向きが定まった。ところで朝鮮における書法は書堂における書の臨模や印刷文化の発展に乗じて、宋や元、明を代表する文人蘇軾や黃庭堅などの古典的な書風が習熟され、上層階層を中心に古典的素養を身につけ、ことのはか学問を貴ぶ気風はさらにこれを深めさせた。朝鮮通信使の隨員に選ばれた学士たちは当然そうした教養を十分に修得した者ばかりであり、特に写字官という職位で来日したものはあらゆる書法を巧みに書き分けた書法における文才の精粹といえる。

さて、日本の各地の寺院で朝鮮通信使による額字は五十程を数える。とはいっても全国の扁額調査は網羅的に調査されたものではなく、未だ十分とは言えないが、年々その実態が明らかとなってきたおり、今後も新たに数を加えられることであろう。現状で確認できる金義信の筆によった扁額は十余枚である（表①）。なかで「海上禪林」（東禪寺）や「金湯山」（早雲寺）の扁額は江戸時代後期の『東都名所図会』『東海道名所図会』のなかでもその存在が紹介されており、発刊当時から朝鮮の雪峯が揮毫したものとの認識がなされていることを示す。朝鮮通信使関係の扁額全体の割合からすると金義信によったものが最も多数であり、その理由は通信使、写字官で二度来日したものは金義信の

ほかにいないということと、額字のほかに金明国画の「寿老人図」の賛や「朝鮮人詩歌帳」（ともに大和文華館）にも金義信の手になる書芸の作を見ることが出来、通信使一行においても確認できる現存作例は比較的多い事が言える。しかしながら、一八〇〇年に刊行された松平定信（一七五八―一八二九）が編纂した『集古十種』『扁額之部』には三六九枚の額字の印影が掲載されるが、金義信の額字は見当たらない。朝鮮人、朝鮮通信使としてはただ一枚掲

（表①）金義信揮毫による扁額とその所在

|   | 扁額文字 | 所蔵  | 宗派       | 所在地     |
|---|------|-----|----------|---------|
| ① | 華藏世界 | 開山堂 | 臨済宗 建仁寺派 | 京都市東山区  |
| ② | 妙喜世界 | 靈源院 | 臨済宗 建仁寺派 | 京都市東山区  |
| ③ | 神撫山  | 禪昌寺 | 臨済宗 南禪寺派 | 兵庫県神戸市  |
| ④ | 禪昌寺  | 禪昌寺 | 臨済宗 南禪寺派 | 兵庫県神戸市  |
| ⑤ | 金湯山  | 早雲寺 | 臨済宗 大徳寺派 | 神奈川県箱根町 |
| ⑥ | 方丈   | 早雲寺 | 臨済宗 大徳寺派 | 神奈川県箱根町 |
| ⑦ | 海上禪林 | 東禪寺 | 臨済宗 妙心寺派 | 東京都港区高輪 |
| ⑧ | 曹溪   | 東禪寺 | 臨済宗 妙心寺派 | 東京都港区高輪 |
| ⑨ | 萬松山  | 龍潭寺 | 臨済宗 妙心寺派 | 静岡県浜松市  |
| ⑩ | 龍潭寺  | 龍潭寺 | 臨済宗 妙心寺派 | 静岡県浜松市  |
| ⑪ | 江國寺  | 江国寺 | 臨済宗 妙心寺派 | 滋賀県彦根市  |

載されるのは金義信の後、一六八二年に来日した写字官李三錫の額字「玉島山」（東京都葛飾区多田葉師堂）であり、空海や後水尾天皇ら宸筆等とともに所載されている。彼の「玉島山」がその他を外して選ばれたのは何故であろうか。李三錫（雪月堂）の扁額がある江戸という地縁とみるべきであろう。同じ雪月堂の扁額が秀吉夫人の北政所が開創した高台寺（臨済宗建仁寺派）開山堂にも「法雲」があり、当時としても名高い名刹である高台寺の扁額よりも玉島山が選ばれたもう一つの理由は、その文字自身に備わった気風が好まれたと解釈するべきかもしれない。いづれにしても『集古十種』の編纂事業は朝鮮通信使を意識したものはなさそうである。

また、日本全国に正使はじめ従事官や製述官が揮毫した額字も散見でき、朝鮮通信使が日本で描いた絵画同様に画員でない者も時には絵筆を握った様子とも似通った一面を見られ、興味深い。

## 二つの妙喜庵

墨跡「妙喜庵」には「癸未季夏上浣朝鮮國上護軍雪峯書」と読める落款がある（図版①）。二度来日した金義信であるが、この落款部分も金義信の筆跡とするならば、は



じめの一六四三年（癸未）の夏ということになる<sup>7</sup>。また、墨跡「妙喜庵」と同じ筆跡の「妙喜世界」扁額が建仁寺塔頭靈源院に存在する（図版②）のだが、同じく左端には「雪峯書」とある。ではここに共通する金義信の書と「妙喜」の二文字は何を意味するのだろうか。

墨跡の所蔵先である大山崎の妙喜庵は臨済宗東福寺莊嚴院の末寺で、もとは連歌師の山崎宗鑑（一四六五～一五五四）の屋敷であり、宗鑑亡き後、明応年間（一四九二～一五〇一）に春嶽士芳に譲られ、禅利妙喜庵が建立されたと伝わる。千利休が作ったといわれる二畳隅炉の茶室「待庵」はあまりにも有名である。

一方の扁額が掲げられる建仁寺山内の靈源院はもと靈泉院といい、その所在地ははじめ両足院の東にあり、元和二年（一六一六）に大中院の北に移り、そして明治六年（一八七三）現在地である妙喜庵の旧跡へ移転している。建仁寺の妙喜庵についてはその開基である中巖圓月（一三〇〇～一三七五）は当代きつての名僧で遺作に『東海一漚集』、『文明軒雑談』などがあって、日本における宋学はこれに負うところが少なくない。五山の学僧中、一人も及ぶものがなかったという彼であるが、性来激烈な理想主義者で、「識見高慢」であったため、当時の禅林の気風にあわず、波乱曲折にとんだ孤高の一生であったという<sup>8</sup>。転居多数の

中巖圓月。他界する間際まで遇した庵は万寿寺東北隅の「妙喜世界」であり、寂した後、門人が建仁の「妙喜世界」を塔所とした。この建仁寺妙喜庵は中巖圓月開基の後、明治六年までどのような過程をたどったのだろうか。一八世紀後半に描かれたとみられる「東山建仁寺全図」には現在の靈源院が立つ場所は妙喜庵と位置づけられており、靈源院が移ってくる明治初頭の頃はちょうど政府が推し進めた廃仏毀釈の頃と合致する<sup>9</sup>。

ところが『拾遺扁額要覧』（一八四三）には建仁寺塔頭靈洞院に扁額「妙喜世界」が存在したと記載されている。

（P.123<sup>⑪</sup>）当時建仁寺山内には幾枚もの朝鮮人の筆になる扁額が存在したようで、金義信（雪峯）の場合は「清涼軒」「清住院」にも妙喜庵の廃絶後に隣接する塔頭の靈洞院が預かっていたということになる<sup>⑩</sup>。なお靈源院と靈洞院は似通った字面の院号であるため、執筆、編集の際の誤認および誤記の可能性も指摘できよう。

さて、この二つの妙喜庵は同じ京都五山である東福寺派と建仁寺派の塔頭であり、その妙喜庵の確定は難航を極める。なぜなら金義信が来日した一六四三年（釣天永浩（建仁寺）／周南円旦（東福寺）、一六五五年は茂源紹柏（建仁寺）／九岩中達（建仁寺）が朝鮮通信使の接判僧の任を預かって対馬から江戸の往来を共にしている。また、東福

寺、建仁寺派の両派から一六四三年から一六五五年の間、対馬以酹庵に輪番し、当地で執務している。そして『拾遺扁額要覧』の東福寺の項に「妙喜庵」は見られないが末部に「当山朝鮮人筆多略之」と記されているのである。(P. 122<sup>(4)</sup>)

## 朝鮮通信使の書

禅宗寺院で塔頭、寮舎が盛んにつくられるようになると、そこに掛ける扁額の需要が生じ、前述のように当初は名僧に依頼していたが、徐々に文人が書くようになったといわれる。<sup>⑩</sup>元来、鎌倉時代に宋・元代の禅宗の伝来とともに、その精神を重視する自由闊達で人間味に富む書体で揮毫された禅宗の書がよろこばれ、室町時代の茶道でも禅林の墨跡が茶席第一のものとして存在感を強めていった。一休宗純(一三九四―一四八二)はじめ幾多の禅僧がそれらの墨跡を残し、『碧巖録』や『臨濟録』などの禅語録を中心としたものに大典を求められる。そうした一行物の書軸が今日も茶席の床に掛け替えられている。法を重視した墨跡の書風は豪放で力あるものを最上のものでした中国宋・元の禅宗の書、鎌倉・京都五山、大徳寺、妙心寺の禅僧の書。それから一七世紀中期に日本へ渡ってきた黄檗の僧(隠元

・木庵・即非)の黄檗の三筆、日本へ来日した明使、そして朝鮮通信使の書である。

日本にやってきた外交使節のうち、明使は室町時代に幕府所在の京都に滞在している。明使のなかで方梅厓によった扁額は大徳寺塔頭の龍源院や妙顕寺などで見ることが出来るが、桃山、江戸時代は外国からの使節は朝鮮通信使と琉球、オランダ使節となり、来日した異国の使節団のうちで朝鮮人が額字が目立つようになる。

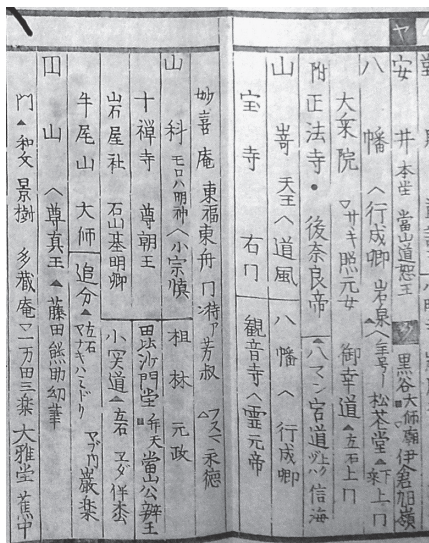
寛永年間の相国寺僧の日録『隔菴記』(寛永二十一年三月条)には、鳳林承章(一五九三―一六六八)が花坊正音なる者より金義信の書軸「明月軒」を借用しており、相国寺において金義信の書が披見されている。鳳林承章が朝鮮通信使に関心を持ち、一行の行列の様子などを観に行つた様子は一六三六年から一六六八年の間に書かれた『隔菴記』によれば一六三六年、一六四三年、一六五五年の三度確認できる。<sup>⑪</sup>ところが額字の揮毫の依頼をするまでには至らなかったようで、相国寺山内には今のところ金義信の扁額は見当たらない。

それではこの「明月軒」はどのような目的に揮毫されたと解釈できるであろうか。「軒」というのは、軒号、寺号、雅号などに用いられ、院号の代わりに用いられることもある。いずれにしても場を意味するものであり、おそらく茶

室の軒名であり、その扁額とすることを目的に揮毫されたものと思われる。

## 扁額と書軸

『拾遺扁額要覧』には大山崎の妙喜庵は掲載されないが、同じ作者で三年前に発行された『山州扁額』で「山崎妙喜庵 東福東舟 同待アン芳叔 フスマ永徳」とあり、扁



〔図版③〕 葭中晴雲堂『山州扁額』部分（1845年）

〔土居次義コレクション〕 京都工芸繊維大学附属図書館蔵

額についての「妙喜庵」の掲載はない。（図版③）金義信の書の額であつてもなぜ掲載されなかったのであらうか。また、書軸として床飾りに掛ける墨跡にしては庵の字は不相应である。そして妙喜庵の書院には東福寺の南宗流という書道の開祖のものであるとの伝承を持つ扁額「妙喜庵」（室町時代）の扁額が掛かっている。『山州扁額』の「東福東舟」がこれにあたるのであらうか。

先に鳳林和尚が「明月軒」の書軸を鑑賞する段では扁額を目的にしたものであるとの推論を紹介した。すなわち元々扁額を目的とした墨跡と想定し得るのではないだろうか。来日する朝鮮通信使は滞在期間中、京都五山僧を頼りに交流をなしており、禅宗寺院で修業した僧侶らが漢字を得意とする通信使一行に扁額揮毫を求める行為は自然であり、またその交流の確かさを物語っている。なお、大山崎の妙喜庵に「明月堂」という名の茶室が待庵と背中合わせに存在する（明治時代まで旧来の茶室があり、現存するものは昭和の新築という）が、軒と堂の一字の違いがあり、おそらく存在したであろう別の茶室に向けたものと思われる。扁額と書軸は茶室の内と外を禅味あふれる空間として演出する為には欠かせないものであり、茶の行いにおいて重要な位置を占めるものである。

## 久田宗匠と妙喜庵

表千家宗匠・久田宗也は茶の道とともに朝鮮文化を愛好し、学者としても高麗茶碗の研究論文を記すなど、茶という関わりから高麗美術館（京都市北区）の理事も勤めた人である。<sup>12</sup> その人柄は清雅で情味厚く、宗匠を慕う人は彼の門徒ばかりではなかった。

生前、偶然に大山崎の妙喜庵について話をうかがう機会があり、そこには「妙喜庵」なる書軸が伝わるとのこと。ところが、それがどうしたものであるのか、その時には聞きそびれてしまった。その後長らくして、朝鮮通信使研究の名著『大系・朝鮮通信使』所載のこの軸装「妙喜庵」を本の上でぼんやり眺めている間に地元の京都で「朝鮮通信使と京都」という展覧会を開催したいという思いが強まり、大山崎町教育委員会を経て妙喜庵住職と相談して、その機会は現実となった。住職の話によれば、この軸は久田宗匠が縁者から市場に出たとの報を受け、自らの財で道具商から購入し、妙喜庵へ寄贈された経緯があるという。久田宗匠の人柄が偲ばれる美談である。しかし、宗匠亡き今となつては以前の来歴やいつ頃の出来事であるかは確認できない。

## むすび

以上、知り得た情報を書き連ね、試論を展開した。本稿を纏める中で京都工芸繊維大学附属図書館所蔵の『扁額要覧拾遺』の存在を知り、調査する機会を得たのは大きな収穫であった。末部に掲載して供覧を請うものとする。

茶禪一味。金義信書の墨跡「妙喜庵」をめぐって、禅文化が漢文を認めるため書道文化との密接な関わりを持っていることと、また茶道文化の一端を担ってきたことが具に確認できた。そしてそれは同時に当時の異文化交流の最先端の事例でもあった。また、大山崎の妙喜庵へこの軸をもたらした昭和の茶人・久田宗也の行動は彼の茶への質実な態度の表れと朝鮮文化への深い慈しみ、そして宗匠一流の風流とも受け止めることができるのである。

（かたやま まりこ 元 高麗美術館研究所研究員）

註（1） 辛基秀・仲尾宏編『大系・朝鮮通信使』第三卷八六頁

明石書店一九九五年

（2） 高麗美術館特別展「朝鮮通信使と京都」図録六六頁 高麗美術館二〇一三年

（3） 上村観光『禅林文藝史譚』「徳川初期の朝鮮通、規伯玄方」

一三五九～一三七八頁

(4) 仲尾宏「『隔窠記』の時代と朝鮮通信使」『木野評論』一七号京都精華大学紀要一九八六年

(5) 呉世昌『檀城書画徵』国書刊行会一九七一年に「金義信號雪峰。金海人。写字官。中部參謀。善書（東國文獻筆苑編）（燃藜室別集）孝宗六年乙未。趙珩・兪瑒・南龍翼通信使行之写字官。（南壺谷扶桑錄）義成為平戸守。要得写字官及画員。暫送金義信・韓時覺等。自此到处請送。以為自己顔面求之者。画夜填擁。書画人等。不勝其苦。亦不勝其喜矣。（南壺谷扶桑錄）寛永二十年。與金明国・李起龍。為通信使隨員（古画備考）」とあるのみ。

(6) 京都府教育委員会編『重要文化財高台寺開山堂修理工事報告書』八〇頁には「額 法雲 横額 雪月堂筆」とある。また、二〇一五年三月現在にも高台寺開山堂堂内中央奥に「法雲 雪月堂」と読める扁額が掛かる（筆者識）。

(7) 辛基秀・仲尾宏編『大系・朝鮮通信使』第三卷86頁明石書店一九九五年には「一六五五（明暦元）年の写字官・金義信の雄渾の書は、扁額とされた。」とあるのは癸未にあたる一六四三年であろう。ただし、落款部分がその当時金義信によって付されたものであるかの検討の余地を残している。

(8) 今枝愛真『禪宗の歴史』至文堂、一九六二年一三〇頁

(9) 小出裕子『近世建仁寺境内における宅地開発と参詣空間の成立について』京都工芸繊維大学大学院博士論文二〇

〇二年には江戸時代の建仁寺寺内とその周辺を描いた「東山建仁寺全図」（建仁寺文書をもとに作成、永井規男氏言よつたもの）を一八世紀後半のものとして取り上げている。

(10) 海老根聡郎「研究資料 方梅崖―人と作品―」『國華』一三七五号、二〇一一年参照

(11) 仲尾宏「『隔窠記』の時代と朝鮮文化」『朝鮮通信使の軌跡増補・前近代の日本と朝鮮』明石書店、一九八九年にはその模様が詳述されている。

(12) 久田宗也「高麗茶碗と茶の湯」『高麗茶碗―論考と資料』高麗茶碗研究会、二〇〇三年

#### 〈参考文献〉

- ・佐賀東周『東山建仁略寺誌』建仁寺、一九一三年
- ・東福禪寺『東福寺誌』東福寺、一九三〇年
- ・黒木拝石／荻野謙堂『書学新講』雄山閣、一九三七年
- ・伊藤東慎『黄龍遺稿』兩足院、一九四七年
- ・吉川一郎『大山崎史叢考』創元社、一九五三年
- ・今枝愛真『禪宗の歴史』至文堂、一九六二年
- ・久松真一『久松真一著作集第四卷 茶道の哲学』理想社、一九七三年
- ・秦恒平／伊藤東慎『古寺巡礼 京都6 建仁寺』淡交社、一九七六年
- ・大岡信／福島俊翁『古寺巡礼 京都18 東福寺』淡交社、一九七



七年

・松下隆章／崔淳雨『水墨画美術体系―李朝の水墨画』講談社、一九七七年

・堀江知彦『茶掛けの書』東京書籍株式会社、一九七七年

・東京国立博物館『日本の書』東京国立博物館、一九七八年

・千宗左ほか『茶道の源流 第四卷遺墨・茶杓篇』淡交社、一九八三年

・安輝濬『韓国絵画史』吉川弘文館、一九八七年

・大和文華館『大和文華館所蔵品図版目録八絵画・書籍（中国・朝鮮編）』大和文華館、一九八八年

・仲尾宏『朝鮮通信使の奇跡―増補・前近代の日本と朝鮮』明石書店、一九八九年

・大山崎町教育委員会『大山崎町埋蔵文化財調査報告書第15集―妙喜庵』大山崎町教育委員会、一九九七年

・西村圭子『対馬宗家の近世朝鮮貿易に関わる以酊庵史料について―建仁寺両足院所蔵文書を中心に』『史艸』三八号日本女子

大学史学研究會、一九九七年

・萩信雄／信廣友江『茶掛を読む』武墨跡』講談社、一九九七年

・京都国立博物館『京都最古の禅寺建仁寺』読売新聞大阪本社、二〇〇二年

・岡部良一『満願寺朝鮮扁額とその由来』『歴史と神戸』二三〇神戸史学会、二〇〇二年

・伊藤東文『両足院―その歴史と文化財―』両正院、二〇〇三年  
・京都国立博物館『龜山法皇七〇〇年御忌記念南禅寺』朝日新

聞社、二〇〇四年

・木田章義／宮紀子『両足院―学問と外交の奇跡―』京都大学大学院文学研究科国語学国文学研究室、二〇〇六年

・兵庫県立歴史博物館『ものと人は船に乗って―ひょうごの港めぐり―』兵庫県立歴史博物館、二〇〇九年

・仲尾宏『日朝関係史論 朝鮮通信使の足跡』明石書店、二〇一年

・大本山東福寺『東福寺の国宝』大本山東福寺、二〇一一年

・能仁晃道『大蔵寺と大解宗脱和尚』大蔵院、禅文化研究所、二〇一二年

〈謝辞〉なお、本稿を記すに当たり所蔵者各位、林亨氏、岡部良一氏をはじめとする多くの識者からのご協力とご理解を賜った。

〈影印〉『拾遺扁額要覧』

編著：葭中晴雲堂易得子

年期：嘉永元年（一八四八）

発刊：中川文林堂

所蔵：京都工芸繊維大学附属図書館

分類：貴重書

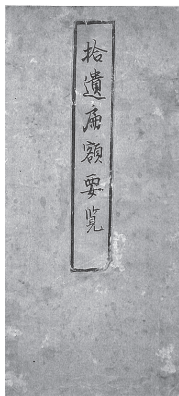
以前の所蔵者：土居次義（一九〇六―一九九一美術史家）  
その他：帙入折本 両面木版刷 裏表五十折

一折：18・3×8・4 cm

このうち、朝鮮通信使と見做せるものは次のとおり。

- |   |   |     |     |         |           |                         |
|---|---|-----|-----|---------|-----------|-------------------------|
| ① | 二 | 西山  | 西芳寺 | 朝セシ     | 春斎        | (安慎徽、一六八二年來日)           |
| ② | ト | 東福寺 | 当山  | 朝鮮人筆多略之 |           |                         |
| ③ | リ | 竜安寺 | 宜春院 | 朝セシ     | 梅隱        | (全榮、一六三六年来日)            |
| ④ | カ | 高台寺 | 法雲  | 朝セシ     | 雪月堂       | (李三錫、一六八二年来日)           |
| ⑤ | タ | 大徳寺 | 徳禪寺 | 朝セシ     | 浦翁        | (不明)                    |
| ⑥ | ク | 金竜院 | 〃   | 黄巽      | (不明)      |                         |
| ⑦ | ケ | 建仁寺 | 大竜庵 | 松雲大師    | (一六〇四年來日) |                         |
| ⑧ | ク | 〃   | 永源院 | 朝鮮      | 貝谷        | (不明)                    |
| ⑨ | ク | 〃   | 久昌院 | 〃       | 雪月堂       |                         |
| ⑩ | ク | 〃   | 両足院 | 〃       | 春斎        |                         |
| ⑪ | ク | 〃   | 知足院 | 〃       | 梅隱        |                         |
| ⑫ | ク | 〃   | 大統院 | 〃       | 〃         |                         |
| ⑬ | ク | 〃   | 正傳院 | 〃       | 甘露門       | 同上                      |
| ⑭ | ク | 〃   | 西来院 | 〃       | 清川        | (不明) 漸入                 |
| ⑮ | ク | 〃   | 清凉軒 | 〃       | 雪峯        | (金義信、一六四三、一六五五來日) 方丈内二有 |

表



裏



- |   |   |     |     |       |
|---|---|-----|-----|-------|
| ⑬ | ク | 清住院 | 〃   | 真照    |
| ⑭ | ク | 〃   | 〃   | 〃     |
| ⑮ | ク | 靈洞院 | 〃   | 妙喜世界  |
| ⑯ | ク | 夕佳亭 | 朝セシ | 白雲    |
| ⑰ | ク | 金閣寺 | 朝セシ | (不明)  |
| ⑱ | ク | 妙心寺 | 麟祥院 | 梅隱    |
| ⑲ | メ | 城東寺 | 建仁寺 | マチ松原下 |
| ⑳ | シ | 相国寺 | 長徳院 | 朝鮮着   |
| ㉑ | ク | 〃   | 朝鮮着 | (不明)  |

以上

ただし梅尾や南禪寺には朝セシと記されない「雪峯」もあり、ここでは福建省出身の黄檗宗の渡来僧即非如一(一六二一〜一六七二)の号と見做すこととした。配置は右上右下左上左下の順である。

①

